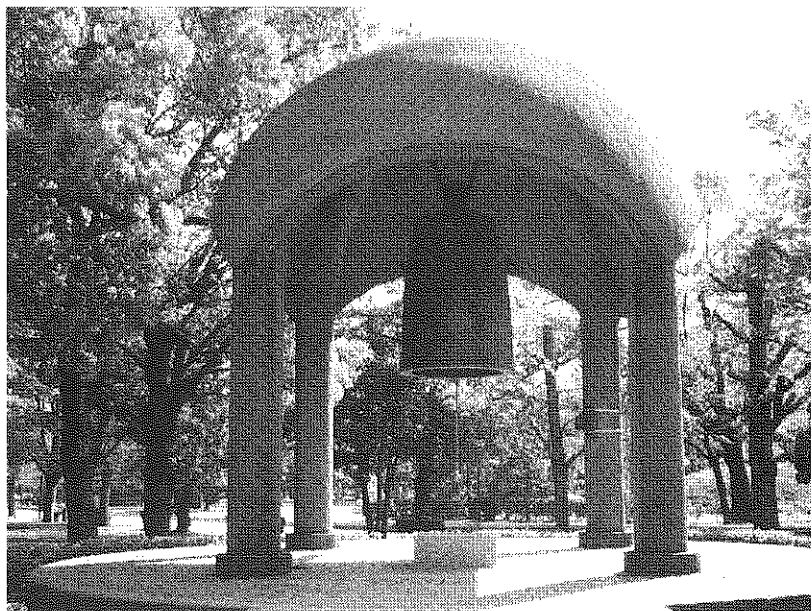


神田山やすらぎ園

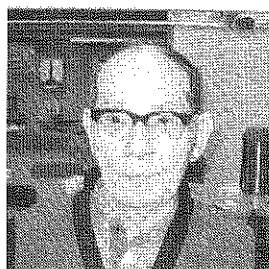
特 別 養 護



平和の鐘

今も思い出す火傷^{やけど}の怖さ

中村 稔（九十一歳）



被爆地……宇品七丁目（爆心地より三km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……高血圧症・腎のう胞・狭心症・貧血症・胆石症

被爆時の状況及びその後の生活

私は、昭和十四年十一月に入隊し、陸軍病院で衛生教育を三ヶ月間受け、宇品の船舶高射砲一連隊に配属されました。

あの日は、七月の月例報告書を提出に宇品十六丁目の指令部に行く途中でした。飛行機を見ながら歩いていたら、突然空から広島市内の半分位の火の玉が落ちたように見えました。耳と目を抑えて道路に伏せ、しばらくすると地面が揺れバイブレーターを当てたような感じで震えました。その後、火の玉が白い煙に変わり一メートル位まで上って自分の方へ流れるように迫ってきました。急いで連隊まで走って帰りましたが、途中は無心で走ったので辺りの様子に気付かなかった

のかもしれない。兵舎は一つおきに上から押えつけたように倒れ、北側の窓ガラスがきれいになくなっていました。

今考えると恐ろしい事です
が、休む間もなく負傷した人々が押しかけ、椅子をベット代わりにし、火傷の^{やけど}手当にあたりました。毎日二十反のサラシを使いましたが、一週間位で無くなり、汚れたサラシを洗って使いました。そのサラシにはうじ虫が沢山付いていたのを、今でも思い出します。手当した内でも目に焼きついて今でも離れないのは、五歳位の女の子のことです。全身火傷で芋を焼いたようになって一言も発せず死んでいった事です。その子が自分の子供（三歳）と重なって見え、その時ほど戦争を憎んだ事はありません。九月四日まで、四千から五千人の手当にあたりましたが三分の二の人が死亡しました。



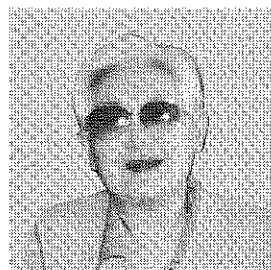
本通りの時計台

時計台のビルは、爆風でマッチ箱をつぶしたようにつぶれている。（林 重男氏撮影）

その後三年位家族の疎開先で過し、佐伯町津田で二年位製材業をしましたが、やはり戦前していた理容の仕事がよいと思い、基町で六十五歳までしました。その後は、デイサービス等利用したり、自由気ままに生活し、平成十二年にホームに入園しました。家族の面会、外出等もあり、快適な生活を送っています。

私の通った道

濱井 八重子（八十七歳）



被爆地……大手町（爆心地より一・五km）

当時の急性症状……上半身外傷

家族の死亡……両親

現在の病状……高血圧症・変形性脊椎症・慢性気管支炎

被爆時の状況及びその後の生活

当時、両親と三人で大手町に住んでいました。姉二人は、結婚し疎開していました。

八月六日の朝、私は日赤病院の裏にある事務所で、下駄の仕分け作業をしていました。

空襲警報から警戒警報に変わったので窓に近づいて見ると、日赤病院の避雷針が突然七色に光り、直後強い熱風が吹き込んできました。同時にガラスの破片が頭・顔・首・両手に刺さりました。両眼にも刺さり、左眼のガラスの破片は入ったままで半年間見えませんでした。傷口からは血が流れ、その血が固まり、皮膚から垂れ下がっていました。顔は真赤に腫れ上がり、意識は朦朧としていました。

空を見上げると、飛行機が次々と飛んでいました。「動いたら機関銃にやられるぞ」と言われ、怖さと痛さをじっと我慢しました。

周りの人が「八重ちゃん死んで」と言っているのが聞こえました。

その日は、日赤病院の庭で過ごしました。



ホームのクラブ活動

外傷や火傷やけどをした学生が次々と運ばれ、庭がいっぱいになり「お母さん！お母さん！」「痛いよ！痛いよ！」と一逸中泣き叫んでいましたが、朝になって兵隊さんが「みんな死んでいるよ！」と言いました。

父は、八月七日火の海となった町を通ってやっと帰って来ましたが、口の中がひどく爛れただ食事も食べれなくなり、八月十四日に亡くなりました。母は、下痢がひどく十月二十六日に亡くなりました。二人共、焼け棒杭を集め町内会の人と姉二人で火葬しました。

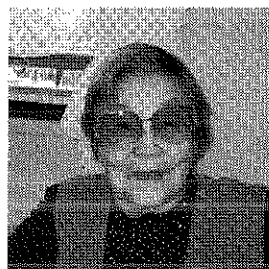
六十三歳まで、日本製鋼所で働き、入園するまで教会で奉仕活動をしました。

甥おいの世話でやすらぎ園を希望し、八十三歳で入園しました。入園させてもらった事が本当に嬉しく感謝しています。

戦争は嫌です、情けないです。二度と同じ目に遭いたくないです。

乳のみ子をおんぶして

増 永 シゲノ（九十歳）



被 爆 地……西観音町（爆心地より一・三km）
当時の急性症状……疥癬
家族の死亡……なし
現在の病状……慢性腎不全・慢性心不全

被爆時の状況及びその後の生活

被爆時、私は三人の子ども（長女四才、長男二才、次男生後十ヶ月）と西観音町かんのんまちの家の中心にいました。

その時、大きな音がしたかと思うと、またたくまに火に包まれました。私は乳のみ子の次男をおんぶし、長女、長男の手を引き、少しばかりの荷物を腰につけ、避難場所ひなんばしょと決められていた地御前ごぜんに逃げました。当時、主人は中国の北支に出征中でした。

それから、二、三日後、吉田の友達を頼って疎開そかいすることにしました。向洋から芸備線の線路のある中三田なかつまたまで幼子三人を連れての行路は辛く大変でした。朝五時から夕方たふの五時近くまで、ほ

とんど飲まず食わずの山越えで、今、思い出し
ても涙があふれます。この時のことは、当時、
四才だった長女も今ではっきりと覚えている
と言います。

それから一年半後、疎開先の吉田より東観音
町の伯父^{おじ}に身を寄せました。戦後の不衛生から
発病した親子四人の疥癬^{かいせん}の治療にと伯父が別府
温泉の『湯の花』を取り寄せ風呂をつかわせて
くれたことは、ありがたく懐しい思い出です。

このようにありがたい思い出もありますが、
六十年を経た今でも、思い出の多くは辛く悲し
いことが多く、時々、平和学習で訪れる生徒さ
ん達にも、未だに被爆の話をする事ができま
せん。

そしてまた、当時、乳のみ子だった次男は小
さい頃から病弱で、現在も健康に不安がある状
態です。唯一、私が心配するところです。



日帰り旅行「ニュージーランド村」にて

私自身は、ホームに入園し、楽しく話し合える仲間もでき日々感謝の毎日です。
これからも、次男の健康を祈りながら、自分でできることは自分でするよう頑張って毎日を過
していきたいと思っています。

